

曲目解説 モーツァルト 交響曲 第29番

二十世紀後半のもっとも偉大なモーツァルト研究者のひとりであり、「比類なきモーツァルト」（白水Uブックス）の著者のジャン ヴィクトル オカールはモーツァルトの交響曲 第29番について、以下のように述べています。

「モーツァルトの全交響曲のうちでも、その後の彼が円熟期に成し遂げた技術的進歩がいかなるものであるにせよ、好みの点からいって1773年のこの三部作（第28番ハ長調 K.200、第25番ト短調 K.183、第29番イ長調 K.201）が最も素晴らしいとためらわずに言いたい。

新鮮さ、素直さ、ほとぼしる旋律、優雅さ、といったすべてのものが若々しい力の爆発のなかで輝いている。モーツァルトがイタリアで得た教訓を何一つ忘れてはいないことが感じられる。歌うような美しさが、ここにはうっとりするほど存分に繰り広げられているからだ。私は「交響曲29番イ長調」を最も高く評価するが、それはのちの偉大なピアノ協奏曲にしか見られない、凝縮したポエジーのゆえである。」



モーツァルト像

モーツァルトは短い生涯の中で41曲の交響曲を作曲しましたが、30曲は18歳までに作曲されています。

それらの中で、第29番 K.201 はモーツァルトの青年期の作品の頂点に立つものと言われています。青年の持つ若々しさなど、みずみずしい魅力に満ちた、モーツァルトの最初の本格的な、魅力のある交響曲でしょう。

さて、この交響曲 第29番 K.201 の曲目紹介ですが、以下に私見を交えて述べてみたいと思います。

第一楽章

第1主題はヴァオリンの主音のオクターブ下降に続き、同音反復の繰り返しで始まります。この特徴的な第1主題は、「何かを問いかけている」ように聴いてみると面白いです。ひっそりと始まりますが、各声部が主題に対して次第に立体的に絡んで、奥行きのある表情を出していきます。さらに管楽器が加わってフォルテになり、「問いかけ」も力強くなってきます。

やがてこれが静まり、第2主題（33小節）が出てきますが、これは第1主題

の「問いかけ」に答えているように聴くことが出来ると思います。例えば「これはそういうことさ...」といった風に。第2主題はリズム的なセカンドヴァオリンの動きに乗り、さらにヴィオラも加わって、盛り上がっていきます。

これらは「問いかけ」のように聴こえるだけですが、作曲者がそれを明確に書いている例もあります。ベートーヴェンの後期弦楽四重奏 16 番の自筆譜において、ベートーヴェンは終楽章の緩やかな導入部の和音の下に、“Muss es sein? (そうでなければならぬか?)”と記入しており、その後の主題には、“Es muss sein! (そうでなければならぬ!)”と書き添えています。

いかにも最晩年のベートーヴェンらしい、頑固な老人の厳しい禅問答のような「問いかけ」ですが、本当は“下宿のおかみさんとの部屋代のやり取り”から発想を得たという、ユーモラスな説があり、私はこの説を信じています。

一方でモーツァルトのこの交響曲は青年期の作品ですので、禅問答とは程遠く、あくまでも明るく、爽やかですが、人一倍茶目っ気がある18歳のモーツァルトが楽しみながら作曲している様子が目に浮かびます。この「問いかけ」は楽章を通して繰り返され、なかなか納得しない様子です。最後に締めくくりでしょうか、一段と高揚して終わります。



色々なモーツァルトの肖像画

第二楽章

弱音器付きのヴァイオリンによる静かな主題ではじまる、しっとりとしたアンダンテ楽章です。ここでも主旋律のヴァイオリンに他の楽器が対位的に絡み合い、話しかけるような旋律（レチタティーヴォ）が交互に現れ、子守歌のように豊かな歌が繰り返し歌われます。楽しい思い出を静かに語り合うようにも聴こえます。

穏やかで楽しい語り合いは延々と続きますが、展開部では調性がいくつか変化し、時々三連符を伴って、リズム的な語り口になります。しかし、また元の調に戻り穏やかな再現部になります。コーダでは弱音器が取り外され、瑞々しい弦楽器の響きが出てきて、爽やかに楽章は締めくくられます。

第三楽章

リズムカルなメヌエット楽章です。付点音符が随所に散りばめられ、何かを訥々と語っている様子で進行します。各節の終わりでは、オーボエとホルンのユニゾンによる楽しく、軽快なファンファーレが入ります。

トリオはしっとりとした流麗さを装っていますが、ここでも何か訴えるよう

な旋律がレチタチーヴォ風に現れます。型どおりに最初のメヌエットに戻って曲は終わりますが、曲の最後、管楽器のファンファーレが出てきて、とぼけた味があります。

第四楽章

交響曲第 29 番で特に印象的なのが最終楽章でしょう。青年期のモーツァルトの交響曲の中では他に類を見ません。短調の交響曲 25 番は、第 1 楽章が映画「アマデウス」で有名ですが、他の楽章の印象はあまりありません。

一方で交響曲第 29 番の終楽章は、躍動感とみずみずしい幸福感に満ちていて、大変印象的です。ホルンの力強い響きもあり、獲物を追って野山を駆ける、狩の雰囲気漂います。要所々で弦のユニゾンによる若々しい力の爆発が表現され、強い輝きをもって伝わってきます。

この楽章は、第 1 楽章の第 1 主題と呼応するかのようにオクターブ下降音型で始まります。続いて堰を切ったように駆け上っていくヴァイオリンが爽快です。その後は旋律的なものになりますが、展開部は第 1 主題の動機のみで構成されて、執拗に繰り返されます。

その繰り返しが心地よい緊張感を作っていきます。再現部の後、第 1 主題の素材によるコーダで力強く全曲が結ばれます。

終わりに

交響曲第 29 番は、モーツァルト 18 歳の作曲ですが、特にその両端楽章において、モーツァルトの天才ぶりが遺憾なく発揮された傑作です。

弦楽器、オーボエ、ホルンという、きわめてつつましい編成のために書かれた交響曲ですが、この曲で古典派の本格的な交響曲の時代が幕を開けたのではないのでしょうか。

青山 俊一